

[ラルフ・W・ハリス]「聖霊」

XII. 賜物の動機と規制

コリント人への第一の手紙 13章、14章

霊の賜物に関する規定が教えられる時、そこにはつねに、ある人たちに心配がある。明らかに、彼らは何かで聖霊の力の流れを妨げてしまうのではないか、ということを心配するのである。



しかし、その必要はない。コリント人への第一の手紙はこの目的のためにパウロにより、靈感をうけて記されたのである。もし、彼が記さなかったとしたら、私たちが楽しみ、愛しているすばらしい真理は、聖書から失われてしまったであろう。

さらに賜物の用法を規制しないために、ただ神の働きを妨げるばかりでなく、多くの者に対して失望と霊的損失をもたらすところの、混乱をもたらしてきたのである。

多分、この心配に対する理由の一つは、何か超自然的なものへの干渉を嫌うことであった。そしてこの嫌悪は聖霊が信者を通して、いかに御自身を現わされるかについての誤解から生じてきたものである。

人間は、決して、御霊が機械的に働くところの受動的な器になるものではない、ということ認めることは最も大切である。これらは聖霊が人間の霊と共に働く時、不完全な人間の器によってもたらされる。人間の霊は完全ではないので、そこに誤りや失敗の可能性がある。そこで、それは聖霊を規制したり、拘束したりすることではなく、人間の霊を規制することが大切である。そうすれば、それは神の霊と正しく共に働くことが出来る。

私たちが行なうことよりも、もっと大切なことは、**それらを行なうことに対する理由、すなわち動機である。**もし私たちの動機が正しくないならば、その結果としての行為もまた不正となるであろう。聖霊に用いられる人に必然的に注意が払われるので、とくに目立つ賜物においては、信者はその動機が最も高いものであるよう注意しなければならない。

賜物の目的は何か

コリントの教会においては霊の賜物に関して混乱があったので、パウロはこれらの賜物について、いくつかの原則をあげたのである。それはまた、今日、私たちのためにも適用されるものである。13章における愛に関する広い原則を述べてから、パウロは14章において特別な教えを語っている。

パウロはこの章の中で「**徳を高める**」という言葉、何回も用いている。この言葉は建築物が土台の上に建てられ、完成する姿を描いている。

かつて、成長し、このように**霊の賜物の目的は**、教会の各メンバー、すなわち教会全体が霊的完成に向い、**キリストの姿にまで達することである**。もし賜物が利己的な目的のために用いられるなら、それらはキリストの体の徳を高めることにはならないであろう。

賜物の目標は何か

パウロは14章の結びと賜物の規制のまとめとして、「**すべてのことを適宜に、かつ秩序を正して行なうがよい**」と言っている（第一コリント 14:40）。前章において、教会の集会においては自由があるべきであるということを語ったが、正しい統制なくして、その自由は教会を益することは出来ない。

私たちが見るところの、すべての神の創造物は美しい秩序を持っている。もしそうでなければ、それは、むなしいものになってしまうであろう。霊の賜物を働かせる場合においても、それが最も多くの教会員たちを益するための、美しい秩序がなければならない。

たとえばパウロは人間の体をあげている（第一コリント 12:12-27）。**キリストをかしらとして、彼の体の各メンバーが互いに正しい関係と認識を持つならば、成長と健全さと幸いがあるのである**。

最高の動機

私たちはコリント人への第一の手紙13章が、偶然にそこに置かれているのではないということを知っている。それは霊の賜物の活用と規制を扱った二つの章の間にある。この章にはパウロが12章の終わりに述べているように、「**最もすぐれた道**」が見いだされる。

欽定（きんてい）訳聖書に「慈愛」と訳されている言葉は実際には「愛」を意味する。パウロが最初の三節に述べている数々の事を見ていただきたい。これらのものを持ち、または行なう人は確かに、素晴らしいクリスチャンと考えられる。しかし、パウロは愛がなければ、これらの資格や行ないはすべてむなしいものであると言っている。

多分、これは私たちが何を行なうかということよりも、いかにあるべきか、ということの方が大切であることを示すのに適当なところである。賜物の活用と現われのために神に用いられることは素晴らしいことであるが、私たちはまた、内なるいのちを豊かにしてゆかなくてはならない。御霊の実は、霊の賜物よりも重要であると言うことは過言であろうか。聖霊の実なくして、霊の賜物を持つことはあり得るということは事実であるが、一方、御霊の実を持つことは、確かに霊の賜物の現われを増進し、それらを受け入れるのを容易にし、有益にする。ことに懐疑家に対してそうである。

神に感謝すべきことには、私たちが御霊の実を持つか霊の賜物を持つかを選択するのではないのである。私たちのうちにキリストのご性質である実を結ばせる同じ聖霊が、また私たちと共に働き、私たちを通して賜物を現わすことが出来るのである。

異言の祝福

あざける者たちは異言を語ることにに関して、「それは、何の役に立つのか」と非難する。彼らはこれが、素晴らしい賜物であることを少ししか知らないのである。パウロの「異言を語る者は神に対して語るのである」という言明だけでも、それは十分な解答である。この異言を語るという特別な状態は、個人的な祈りと賛美に関するものである。聖霊が私たちの弱さを助ける時の礼拝は、何と自由があることであろうか（ローマ 8:26）。こうして私たちは信仰によって神に近づくのである。ローマ人への手紙 8 章 27 節は神の御旨に従って、聖徒たちのために、とりなす聖霊について言明している。私たちが自国語で祈る時、つねにそれが御旨に従った祈りであるということは確かではない。なぜなら「私たちはどう祈ったらよいかわからない」からである。しかし、私たちが聖霊によって語らせられる異言で祈る時、私たちは神の御旨に従って祈っていることを確信出来る。そして「何事でも神の御旨に従って願い求めるなら、神はそれを聞きいれて下さる」（第一ヨハネ 5:14）。祈りに対する素晴らしい答えは、ペンテコステの教会にこそあるべきである。

教会における異言の用法

教会においても異言の役割がある。時にはそれらは末信者へのしるしとして与えられ、彼らが理解出来る言葉によって与えられる（第一コリント 14:22）。この場合、それらはしるしである。ほかの場合は教会へのメッセージとして与えられ、啓発、教え、勧めとして与えられる。もちろん、このような場合は訳が与えられるべきである。この補足の賜物なくしては、異言のメッセージは無価値であり無益なもので、パウロの制定した規定を犯すものである。

教会に一人の公認の通訳を必要とはしない。信者に異言を語らせるために油注いだ同じ聖霊は、彼にその訳を与えることが出来るのである。事実、パウロは異言を語る者は、自分でそれを解くことが出来るように祈りなさいと勧めている（第一コリント 14:22）。

普通、伝道者は神の言葉を語ることに力を入れるべきである。賜物の目的はイエスご自身が言ったように、御言葉を確かなものとすることである（マルコ 16:17,20）。なお、預言は、最も偉大な賜物の一つであり、福音説教の大切な要素であるべきである。これらの理由から、パウロは一つの集会において、三つの異言のメッセージがあれば十分である、との原則を制定している。このような規制はまた、これらのすばらしい賜物を平凡化させないようにしている。

預言の重要性

パウロは預言を発言の賜物の中で、卓越した立場に置いている。コリント人への第一の手紙 14 章 1 節の中で、彼は信者たちに預言することを熱心に求めるように言っている。これは預言が傑出した賜物の一つであることを暗示している。

霊の賜物は決して、ある少数の人々に限られてはいない。すべての救われた人は聖霊に満たされるべきであり、聖霊に満たされた信者は、霊の賜物の現われのために用いられることを期待すべきである。ここに信仰が働かされなければならないが、聖霊にゆだね、聖霊と共に働く時、信者は霊的奉仕へと踏み出して行くことが出来るのである。